



ハンチントン西壁  
1976年6月24日登頂  
大阪府勤労者山岳連盟隊  
撮影・提供・織田博志

## これまでの登山・労山…そしてアルパ インクライミングのことなど No.6

くすのき山遊会 織田博志

# 山のトレーニングとアルパインを考える

武術や武道の世界ではトレーニングとは言いません。稽古と言います。古きを稽えると訓み、過去の創始者、宗家の演武（古武道や居合いのこと。高橋記）をモデルとして自ら工夫することを意味しています。

剣道で木刀で素振りを繰り返す。一日五百本千本と振るなどは今でいうコンディショニングにあたります。もっと重い物で素振りをする…今ではウエイトトレーニングにあたります。

どの分野でもそうですが、基礎をしっかりと反復練習すると、やがて量から質への転換、し目からウロコ、という素晴らしい体験につながっていきます。

私は修行時代、トレーニングではなく稽古をしました。武道にひとつ柔道を4年間学んでいた影響かもしれません。テニスをするのに同じ球のラリーといって卓球で稽古をする人はいません。同じくアルパインクライミングは山岳の中で稽古しなければ

と思いました。

道場の不動岩なども通いましたが、夜行列車で大阪を出発し、穂高の屏風岩や錫杖岳の岩場を登攀し、夜行列車で帰阪という時間的に辛いことを続けていました。70年代という20歳代の時です。だから、不動岩で20本登るという凍稜会の伝統的な練習などは楽なものでした。今、思っても若者達の情熱、は凄いものです。現在のように土日休みではありませんし、仕事も長時間労働でした。冬季登攀も同じように夜行列車で出て一泊二日で、川越信也さんと錫杖岳北沢大滝から本峰アイスリンネを登攀して登頂、後北の科尔から戻り、翌日、前衛フェース中央壁ダイレクトルートを登攀して烏帽子岩、西肩をクリヤ谷へ下り、その日のうちに帰阪したものでした。休暇の少ないなか、工夫をして山岳へ通いました。ラッセルも強くなり、登攀スピードも上がり、地力がついてきました。

私が通ったアルプスでも、アラスカでも発想が面白く、興味の湧く登攀が成されていました。60年代、既にマッターホルン全山稜縦走登攀が実践されていました。その頃は冬の三大北壁の時代でした。日本では山学同志会の小西さん、星野さん、遠藤さんが見事な成果を挙げられていました。シャモニで小川信之さんの「フーテンの寅さん」、口演は楽しませていただきました。小西さんご夫妻とは、奥穂高岳登山でご一緒しました。小川さんは穂高で、小西さんはマナスル、星野さんは蒲田富士で亡くなりました。小西さん達の夢が、冬の三大北壁から、ヒマラヤ、ジャヌー、カンチェンジュンガ、エベレスト、K2へとつながっていくのは見事であり、感動でした。私も自分のアルパインクライミングを続け、「自分が納得したい」と思いました。最も厳しい勝利「自分に勝ちたい」と思いました。

ミシェル・ピオラはモンブラン山群に新時代が到来したことを告げ、多くのラインを開拓しました。87年のアイガー北壁北ピラーは傾斜、難度とも一級のルートです。アルプスの岩壁のスピード登攀、最短タイムが競われていました。これら新ルートの開拓やスピード登攀は、やがてヒマラヤや辺境の山々に拡がっていくのです。これをやったら面白い、わくわくする衝動に若者達が挑戦していたのです。アルパインスタイルの到達点ともいえる登攀がエベレスト北西壁でスイス人のエアハルト・ロレタン、ジャン・トロワイエにより成功しました。同行したフランス人のピエール・ベジャンは8千mで引き返しましたが、ロレタンらが下山してきた晩に再度挑みましたが、8300mで断念しました。下山後1時間程で粉雪の雪崩がルートにとったクーロワール（岩壁に食い込む急な岩溝：はてなキーワード）を襲った。危ないところで

した。5850mのアタックベースから2日ほどで3000mの標高差を登攀、登頂、下降しています。天候の安定した短い好天と落石や岩場の露出をおおう雪の多い時期を選び、ルートは風の影響を受けにくい西稜の風下にとった。より山頂にダイレクトなラインどりでした。テント、ロープ、ハーネスも持たず、夜間に登り暖かい昼頃憩い降り下った。過去の登攀を研究し、経験を積み「古きを稽(かんが)え、自ら工夫して、大胆に実践したのです。無酸素の登攀でした。78年のペーター・ハーベラー、ラインハルト・メスナーの無酸素初登頂の8年後でした。80年、メスナーは8月20日に3日間で無酸素単独で北稜からトラバース北壁上部を登り、下りました。アルパインクライミングのヒマラヤにおける偉業です。6年後、ロレタン・トロワイエは北西壁で偉業を達成することができました。断念したベジャンは翌年スペイン隊と挑みますが、8700mで断念しました。ベジャンはK2北西壁初登攀、カンチェンジュンガ単独登頂、92年にアンナプルナ南壁で亡くなりました。ベジャンは私と同じ年齢でしたので活躍に注目していました。アルパインクライマーは時として一瞬に命を奪われます。アルパインクライマーが見る夢には表裏一体の危険が山そのものにも自分自身にも内在しています。だからこそ「古きを稽え先人たちの実践をモデルとして自ら工夫して大胆に実践する、ことが大切だと思います。

そして、やはりアルパインクライミングにはトレーニングや練習というよりも稽古という言葉があうように私には思えるのですが。